

# 当麻

世阿弥作

前

ワキ

シテ

化女

ツレ

シテ

後

ワキ

中将姫

前に同じ

旅僧

化尼

シテ

「教へうれしき法の門。く。開くる道に出でうよ。

詞

「是は念佛の行者にて候。我此度三熊野に參り。下向道に趣きて候。又是より大和路にかかり。当麻の御寺に参らばやと思ひ候。

道行  
「程もなく。帰り紀の路の関越えて。く。こや三

熊野の岩田川。波も散るなり朝日影。夜昼わかぬ心地して。雲も其方に遠かりし。一上山の麓なる。当麻の寺に着きにけり。く。

「一念弥陀仏即滅無量罪とも説かれたり。

「八万諸聖教皆是阿弥陀とも有りげに候。

「釈迦は遣り。

「弥陀は導く一筋に。

「心ゆるすな南無阿弥陀仏と。

「称ふれば。仏も我もなかりけり。

「南無阿弥陀仏の声ばかり。

「涼しき道は。

二人 「頼もしや。

次第 「濁りにしまぬ蓮の糸。くの。五色にいかで染みぬらん。

シテサシ 「有難や諸仏の誓ひ様々なれども。わきて超世の悲願とて。迷ひの中にも殊に猶。

二人 「五つの雲は晴れやらぬ。雨夜の月の影をだに。知らぬ心の行くへをや。西へとばかり頼むらん。実際にや頼めば近き道を。何遙々と思ふらん。

下歌 「末の世に。迷ふ我等が為めなれや。

上歌 「説き遺す。御法は是ぞ一声の。く。弥陀の教へを頼まづは。末の法。万年々経るまでに。余経の法はよもあらじ。たまく此生に浮まづは。又いつの世を松の戸の。明くれば出でゝ暮るゝまで。法の場に交じるなり。御法の場に交じるなり。如何に是なる方々に尋ね申すべき事の候。

シテ詞

「何事にて候ふぞ。

ワキ詞

「何事にて候ふぞ。

ワキ

「是は当麻の御寺にて候ふか。

シテ「さん候当麻の御寺とも申し。又当麻寺とも申し

候。

ツレ「又是なる池は蓮の糸を。すゝぎて清めし其故に。

染殿の井とも申すとかや。

シテ「あれは当麻寺。

ツレ「是は染寺。

シテ「又此池は染殿の。

二入「色々々所々の。法の見仏聞法ありとも。それを  
もいさや白糸の。唯一筋ぞ一心不乱に。南無阿弥  
陀仏。

ワキ「實に有難き人の言葉。即ち是こそ弥陀一教なれ。

さて又是なる花桜。常の色には變はりつゝ。是も  
故ある宝樹と見えたり。

ツレ「實によく御覽じ分けられたり。あれこそ蓮の糸を  
染めて。

シテ

「掛けて乾されし桜木の。花も心の有る故に。蓮の色に咲くとも云へり。

ワキ

「中々なるべし本よりも。草木国土成仏の。色香に染める花心の。

シテ

「法の潤ひ種添へて。

ワキ

「濁にしまね蓮の糸を。

シテ

「すゝぎて清めし人の心の。

ワキ

「迷ひを乾すは。

シテ

「緋桜の。

地

「色はえて。掛けし蓮の糸桜。」

花の錦の経緯

に。雲の絶間に晴れ曇る。雪も緑も紅も。唯一声の誘はんや。西吹く秋の風ならん。」

ワキ詞

「猶々当麻の曼陀羅の謂委しく御物語り候へ。

地クリ

「そもそも此当麻の曼陀羅と申すは。人皇四十七代の帝。廢帝天皇の御宇かとよ。横佩の右大臣豊成と申しゝ人。

シテサシ

「其御息女中将姫。此山にこもり給ひつゝ。

地

「称讚淨土經。毎日読誦し給ひしが。心中に誓ひ給ふやう。願はくは正身の弥陀来迎あつて。我に拝まれおはしませと。一心不乱に觀念し給ふ。

シテ

「然らずは畢命を期として。

地

「此草庵を出でじと誓つて。一向に念佛三昧の定に入り給ふ。

クセ

「所は山陰の。松吹く風も涼しくて。さながら夏を

忘れ水の。音も絶々に。心耳を澄ます夜もすがら。

称名觀念の床の上。座禪円月の窓の内。寥々と有る折節に。一人の老尼の。忽然と來りたゞめり。是は如何なる人やらんと。尋ねさせ給ひしに。老尼答へて宣はく。誰とはなどや愚かなり。呼べばこそ來りたれと。仰せられける程に。中将姫はあきれつゝ。

シテ

「我は誰をか呼子鳥。

地

「たづきも知らぬ山中に。声立つる事とては。南無阿弥陀仏の称へならで。又他事もなき物をと。答へさせ給ひしに。それこそ我名なれ。声をしるべに来れりと。宣へば姫君も。さては此願成就して。正身の弥陀如来。実に来迎の時節よと。感涙肝に銘じつゝ。綺羅衣の御袖も。しをるばかりに見え給ふ。

ロンギ地

「實にや貴き物語。即ち弥陀の教へぞと。思ふに付けて有難や。

二人 「今宵しも。二月中の五日にて。しかも時正の時節なり。法事をなさん為め。今此寺に來りたり。

地 「法事の為めに來るとは。そもそも如何なる御事ぞ。二人 「今は何をか包むべき。其いにしへの化尼化女の。地 「夢中に現じ来れりと。

二人 「言ひもあへねば。

地 「光さして。花降り異香薰じ。音楽の声すなり。

恥かしや旅人よ。暇申して帰る山の。二上の嶽とは二上の。山とこそ人はいへど。誠は此尼が。上りし山なる故に。尼上の嶽とは申すなり。老の坂を登り登る。雲に乗りて上りけり。紫雲に乗りて上りけり。（中入）

ワキ詞

「かく有難き御事なれば。重ねて奇特を拝まんと。

歌  
「いひもあへねば不思議やな。く。妙音聞え光さし。歌舞の菩薩の目のあたり。顕はれ給ふ不思議さよ。く。

後ジテ

「唯今夢中に顯はれたるは。中将姫の精魂なり。我娑婆に在りし時。称讚淨土經。朝々時々に怠らず。信心誠なりし故に。微妙安樂の潔界の衆となり。本覺真如の円月に座せり。然れどもこゝを去る事遠からずして。法身却来の法味をなせり。

地  
「有難や。尽虚空界の莊嚴は。眼は雲路にかゝやき。

シテ  
「転妙法輪の音声は。聴宝刹の耳に充てり。

地 「蕭然とある暁の心。」

シテ 「誠に涼しき。道に引かる、光陰の心。」

地 「惜しむべしやな。く。時は人をも待たざる物を。

すなはちこゝぞ。唯心の淨土經。いたゞきまつれや。

く。攝取不捨。

シテ 「為一切世間。說此難信。」

地 「之法是為甚難。」

シテ 「實にも此法甚しければ。」

地 「信ずる事も難かるべしとや。  
シテ 「唯頼め。」

地 「頼めや頼め。」

シテ 「慈悲加祐。」

地 「令心不乱。」

シテ 「乱るなよ。」

地 「乱るなよ。」

シテ 「十声も。」

地  
「一声ぞ有難や。 (早舞)

シテ  
「後夜の鐘の音。

地  
「後夜の鐘の音鳧鐘の響き。 称名の妙音の。 見仏聞  
法の色々の法事。 実にも普ねき光明遍照。 十方の  
衆生を。 唯西方に迎へ行く。 御法の舟の水馴棹。  
御法の舟のさをなぐるまの。 夢の夜はほのぐと  
ぞなりにける。